

やくしがね
薬師ヶ根遺跡

所在地 豊明市沓掛町
(北緯35度04分00秒 東経137度01分46秒)
調査理由 県道春木沓掛線道路改築工事
調査期間 平成18年5月～6月
調査面積 600㎡
担当者 小澤一弘・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「知立」)

調査の経過 発掘調査は、県道春木沓掛線改築工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成18年度に、工事予定道路が県道57号と交差する北側の地点(06調査区、750㎡)を発掘調査し、奈良時代末の須恵器の集積や中世の溝、掘立柱建物および中世前半の遺物の出土を確認した。今年度は交差点南側に調査区(07調査区)が設定された。

立地と環境 遺跡は名古屋市南東部の丘陵が境川に向かって下る斜面地端部に立地し、標高約16～19mである。遺跡範囲には埋没谷が一部含まれ、06調査区内の埋没谷では居住地の遺構はなかったが、古代～中世の土器や陶器が多数出土する包含層が確認された。07調査区はその埋没谷の延長に位置する。

調査の概要 06調査区から続く丘陵端部の斜面は、07調査区内では地山を大きく切り込む削平を受けており残っていなかった。削平地(013SX)からは06調査区と同様の中世前半を中心とする遺物が出土しており、集落がここまで広がっていたことをうかがわせる。削平面は標高約14.4mであり、それ以下の標高では埋没谷の遺物包含層が残存していた(001SX)。調査は砂礫の混じる層(001SX上層)を掘削後に井戸(002SE)などを検出し、その後黒色粘土層(001SX下層)の掘削を進めた。

須恵器の大量廃棄 001SX上層は中世の遺物を多く含むが、比較的残りの良い須恵器が多数出土した。それは上層と下層の境近くで特に顕著である。時期は折戸10号窯式期を中心とし、器種は蓋・杯・盤・高盤・薬壺・甕・水瓶などがある。またわずかながら融着したものや窯道具などもある。これら須恵器の評価については、窯とは別の場所における選別の過程で廃棄されたものと推測しているが、窯跡の存在についても考えておきたい。なお001SX下層下にはいくつかの窪地状の遺構がありその位置と須恵器の集中域がほぼ重なることから、下層遺構



井戸と溝検出状況



井戸断ち割り調査の状況

に影響されて窪地状となった下層上面に土器溜まりができたものと思われる。

なお、07調査区では黒笹90号窯式期から東山72号窯式期の灰釉陶器碗・皿が出土した。この時期の遺物は06調査区では少数であり対照的である。また須恵器・灰釉陶器に墨書されたものが散見される点も特記できる。

中世の井戸 001SX下層上面で検出した002SEからは排水用の小溝(003SD)がほぼ東西方向にのびる。002SE掘り方の縁には拳大の円礫が貼り付けられ、全周の約40%が残存していた。装飾的な意味合いが強いと思われる。井戸の側構造は、四隅に柱をもつ縦板構造で、縦板は3～6cmの厚さがあり、特に北面側板は戸板から転用されたとみられる一枚板である。掘り方の深さは確認面から約60cmと浅く、底から曲物の出土はなかった。掘り方内から山茶碗が出土したことから中世前半に構築されたと推定する。

遺跡の特徴 07調査区においても須恵器の大量廃棄に直接かかわる遺構を確認することはできなかった。しかしその出土範囲からすると中世集落遺構と重複するようにして立地した可能性が高く、遺物の整理作業を通じてこれを究明する必要がある。また中世集落については、鉄滓から鍛冶施設の存在、青磁や白磁片が目立つ点が注目され、江戸時代末期の村絵図の遺跡該当箇所「城跡」の記載があることとの関連が問題になってこよう。

(永井邦仁)

